

# 巻頭特集 韮崎「武田乃郷」で兄弟愛を育んだ 工学博士・大村朔平の偉業

巻頭特集

「世の中はシンプルなのです」。自ら構築した普遍的なシステムについて、そう話す大村朔平さん。自然エネルギー発電事業などの総合コンサルティング・プランニングを手がけている。韮崎市神山町にある「螢雪寮」は生家で、一緒に育ったのはあの大村智博士。「ノーベル賞を取った兄貴とは同じ部屋だったけど、勉強機に向かっての姿はあまり見たことがなかったねえ」と…ユーモアたっぷりに回想しながら、地元への熱情と今後の展望を語ってくれた。



**大村 朔平さん(80歳)**  
 韮崎市生まれ。山梨大学工学部応用学科卒業。横浜国立大学に就職し退職後、日揮株式会社に入社。1997年に独立し「株式会社システムズ」を設立、代表取締役社長に就任。他に「バンブーマテリアル株式会社」「有限会社朝日山芸術陶器研究会」の代表取締役社長も兼務している。「新しい蒸溜計算法に関する研究」で工学博士の学位を取得。「企画・計画・設計のためのシステム思考入門」「一般システムの現象学」など著書多数。



【会社を共に営む妻・悦子さんとの談話】  
 悦子さん:「夫も智さんも、寝るのと起きるのがそれは上手なの。朝の3時くらいに起きて、仕事のパートナーと電話でやりとりして、終わるとぱっと寝ちゃう。こちらはいったん目が覚めると、そうはいかないから大変よ」  
 朔平さん:「子どもの頃に蚕の世話をしていたからさ。蚕は桑の葉をやらないと死んじゃうので、真夜中や明け方に必ず起きたもんだよ。そのあとすぐ寝るわけ。その癖が今でも染みついてるんだよ」



**大村3兄弟の貴重なスナップ**  
 「この時は食事をしながら雑々談の議論をした。人間の能力は、兄が「DNA説」私が「環境説」を唱えてね。結局私が負けましたよ(笑)」

朔平さんが少年時代、大村家の山から取ってきた実生の松が大きく育った庭も綺麗に維持されている生家「螢雪寮」。



尊敬する作家は魯山人で27歳から陶芸を続けている朔平さん。作品は「武田乃郷白山温泉」に展示されている。



幸福の小径を走って通学し、農作業で鍛えた自慢の足

「兄、弟の男3人に、一番上の姉と末の妹がおり、両親と祖母の8人で一緒に長らくこの家で暮らしました」と大村朔平さん。生家は今もなお、韮崎大村美術館、武田乃郷白山温泉、そば処小路など、大村智博士が開設した名所のある神山町の一角に建てられており、「螢雪寮」と名づけられ、面影をそのままに維持されている。

「兄貴の智とは机を並べていたけれど、うちでは百姓仕事をちゃんとやっていたら怒られなかったし、教師だった母でさえ「勉強しなさい」とは言わなかったから、お互い通信簿はさしてよくなかった」。そう快活に笑う朔平さん。「幼少より乗馬を嗜んでおり、なんて聞こえはいいけど、兄貴と二人で乗り回していたのは農耕馬。鞍が回転して馬のお尻の前になっちゃった時は焦ったねえ」と楽しい話も聞かせてくれる。

裏山に焚き木を取りに行ったり、炭焼場から炭を運んだり、子どものうちから手伝えることはたくさんあって、それを苦に思ったことはないという。

「学校までは歩かずに駆けて行きましたね。今の『幸福の小径』を草鞋で毎日走っていたのです。そうして自ずと鍛えられた健脚は朔平さんの一番の自慢だそうで、韮崎高校に在学中は競歩大会で優勝したこともあるという。

「昔は甘利山にも雪が積もって、板をかついでよく登っていた兄貴は、スキー部の遠征費を稼ぐために、夏場はトレーニングも兼ねて背負子で石を運ぶアルバイトをしていました。かつては木で出来ていた武田橋が台風で流されることもあり、そのような仕事に結構あったんですよ。それから私と弟も一緒に3人で新聞配達もしましたね」。朔平さんは懐かしそうに振り返る。

時代が求める仕事するために、シンプルにシステムを体系化

朔平さんは、プラントエンジニアリング会社「日揮」に勤務していた時に、コンピュータがまだ今のようにな主流を占める前からインタラクティブの仕組みを作って、独自のWBS (Work Breakdown Structure) 体系を構築し、プロジェクト管理に活用できるようにした。「それから50年経った今でも、その体系はすべてのプロジェクトでそのまま使われており、普遍的なシステムだという証ですね」と話す。

56歳で退職して独立し、現在も代表を務める「株式会社システムズ」を設立した朔平さんは、全国各地で環境・自然エネルギーに関する総合コンサルティングとプランニングなどを手がけ、フィールド調査、プロジェクトマネジメントを実施し、北杜市では太陽光発電の開発事業に携わり、韮崎市では太陽光発電と小水力発電のオーナーとなっている。

「時が進むにつれて、物事は複雑多岐にわたるようになりますが、世の中は常にシンプルなのです。1億円の仕事も1兆円のプロジェクトも根本は同じ。シンプルなシステム思考で問題を解決できます。そう語る朔平さんは、「時代が求める仕事」「付加価値の高い仕事」をする！という信念を持っており、兄の智さんの相談を受け、事業の企画立案や計画推進などについて専門知識を提供することもあるという。「内心、身内はハラハラしていたのですが、今では「朔平は必ず世の中を変えるような大きなことをやると思っていた」と言ってくれるようになりました」とにっこり笑う。

何を成すのも全てを決めるのは心！ 協働するチームを大切に。

八ヶ岳の姿がシンメトリカルに裾野まで見え、茅ヶ岳、奥秩父連山、そして富士山まで一望できる神山地区の景色を世界のどこよりも誇りに思い、私財を投じ

「朔平は脳しんとうで頭が良くなった」と言われている(笑)

「朔平は脳しんとうで頭が良くなった」と言われている(笑)

「兄、弟の男3人に、一番上の姉と末の妹がおり、両親と祖母の8人で一緒に長らくこの家で暮らしました」と大村朔平さん。生家は今もなお、韮崎大村美術館、武田乃郷白山温泉、そば処小路など、大村智博士が開設した名所のある神山町の一角に建てられており、「螢雪寮」と名づけられ、面影をそのままに維持されている。

「兄貴の智とは机を並べていたけれど、うちでは百姓仕事をちゃんとやっていたら怒られなかったし、教師だった母でさえ「勉強しなさい」とは言わなかったから、お互い通信簿はさしてよくなかった」。そう快活に笑う朔平さん。「幼少より乗馬を嗜んでおり、なんて聞こえはいいけど、兄貴と二人で乗り回していたのは農耕馬。鞍が回転して馬のお尻の前になっちゃった時は焦ったねえ」と楽しい話も聞かせてくれる。

裏山に焚き木を取りに行ったり、炭焼場から炭を運んだり、子どものうちから手伝えることはたくさんあって、それを苦に思ったことはないという。

「学校までは歩かずに駆けて行きましたね。今の『幸福の小径』を草鞋で毎日走っていたのです。そうして自ずと鍛えられた健脚は朔平さんの一番の自慢だそうで、韮崎高校に在学中は競歩大会で優勝したこともあるという。

「昔は甘利山にも雪が積もって、板をかついでよく登っていた兄貴は、スキー部の遠征費を稼ぐために、夏場はトレーニングも兼ねて背負子で石を運ぶアルバイトをしていました。かつては木で出来ていた武田橋が台風で流されることもあり、そのような仕事に結構あったんですよ。それから私と弟も一緒に3人で新聞配達もしましたね」。朔平さんは懐かしそうに振り返る。

時代が求める仕事するために、シンプルにシステムを体系化

朔平さんは、プラントエンジニアリング会社「日揮」に勤務していた時に、コンピュータがまだ今のようにな主流を占める前からインタラクティブの仕組みを作って、独自のWBS (Work Breakdown Structure) 体系を構築し、プロジェクト管理に活用できるようにした。「それから50年経った今でも、その体系はすべてのプロジェクトでそのまま使われており、普遍的なシステムだという証ですね」と話す。

56歳で退職して独立し、現在も代表を務める「株式会社システムズ」を設立した朔平さんは、全国各地で環境・自然エネルギーに関する総合コンサルティングとプランニングなどを手がけ、フィールド調査、プロジェクトマネジメントを実施し、北杜市では太陽光発電の開発事業に携わり、韮崎市では太陽光発電と小水力発電のオーナーとなっている。

「時が進むにつれて、物事は複雑多岐にわたるようになりますが、世の中は常にシンプルなのです。1億円の仕事も1兆円のプロジェクトも根本は同じ。シンプルなシステム思考で問題を解決できます。そう語る朔平さんは、「時代が求める仕事」「付加価値の高い仕事」をする！という信念を持っており、兄の智さんの相談を受け、事業の企画立案や計画推進などについて専門知識を提供することもあるという。「内心、身内はハラハラしていたのですが、今では「朔平は必ず世の中を変えるような大きなことをやると思っていた」と言ってくれるようになりました」とにっこり笑う。

何を成すのも全てを決めるのは心！ 協働するチームを大切に。

八ヶ岳の姿がシンメトリカルに裾野まで見え、茅ヶ岳、奥秩父連山、そして富士山まで一望できる神山地区の景色を世界のどこよりも誇りに思い、私財を投じ